

# 前・新検事総長「検察改革は不十分」 想像を絶する原田元検事総長の捜査手法

米軍の新型輸送機オスプレイの強行搬入で森本防衛相と玄葉外相に抗議が殺到。一方、米軍岩国基地は24日、オスプレイの機体整備を始めること発表。日本国の周辺事情を考えれば、すでに有事を想定しなければならぬ状況だ。

東北大地震がよい例で、もはや想定外との言い訳は通用しない。

日本の背骨である捜査機関の改革は急務だ。

さて先月の人事異動から改革の糸口を探ろう。

まず、7月21日付毎日。「改革は不十分」続けて実行を」



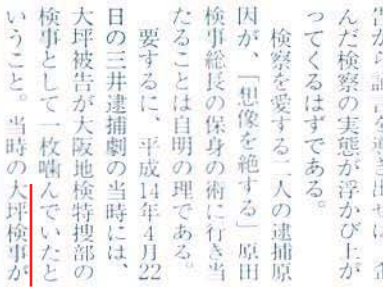
笠間治雄前検事総長



原田元検事総長



大坪元大阪特捜部長



三井環元公安部長

の就任記者会見では「改革のバトンを引き継いで信頼回復がなされるよう全力で取り組んでいく」と決意を示した。どうであろう。検察の改革はまだ不十分との認識である。

また同日付四国新聞での小津博司新検事総長氏の記事。「昨年8月まで務めた次長候補

## 大坪検事の役は虚偽調書作成 改革の糸口は三井公安部長の逮捕

というのは、社会正義の実現に燃え巨悪に立ち向かいたいと願う検察関係者は、検察組織の改革を真に切望しているからである。

前検事総長の笠間治雄氏も小津博司新検事総長も、検察の改革はいまだ不十分で、なんとか改革の糸口を掴みたい

の思いが伝わってくるのではないか。この検事総長の謙虚さと、検事や検察事務官の思いが一つになれば検察の改革は必ずや実現できるはずだ。

事時代に、検察改革の一環で全国各地の地検を回った。一線の検事や検察事務官らと膝を突き合わせて、負担の重さや悩みを聞き、組織への要望を話し合った。「生の声を聞くのが大事。総長になってもできるだけ多くの現場に足を運びたい」と意欲的だ。」

検察のトップである原田検事総長の方針とか意向に反って、暴力団渡真利の協力を得て、三井逮捕の虚偽調書を作成したということだ。

さて本紙川上も、検察の信頼回復を願う者の一人として、検察改革の実現に努力をしようではないか。

暴力団の協力を得て三井逮捕を逮捕したとなれば、当然然を逮捕したの原理から言えば、貸し借りの原理から言えば、検察は暴力団に借りがでたことというところもある。

まず、検察が改革を必要となつた起点日である歪んだ原因の日を特定しよう。

平成14年4月22日を「原田検事総長の想像を絶する指揮権発動の日」と名付ける。

そして本紙川上が検察改革に期待を寄せるのは、検察に逮捕された元検事二人の存在。

一人は平成14年4月22日に大阪地検特捜部に現役で逮捕された大阪高検元公安部長の三井環氏。もう一人は、平成22年10月1日に犯人隠避罪で

三井氏一もう一度生まれ変わった職業を選ぶとなれば検事をやりたい。」

大坪氏「私が検察に厳しいのは(検察を)愛しているからです」

この二人が吐いた想いの言葉で、「検察のあり方検討会議」委員である郷原信郎(元東京地検特捜部)弁護士が二人の想いを吸い上げれば検察改革はできるということだ。

さいわい郷原弁護士は、大坪弘道被告の弁護団に控訴審から参加した。

機が熟したのだ。

一番で有罪判決を受けた大坪被告の虚偽調書作成という事実を的を絞って、虚偽調書作成の手口を知ることになった切っ掛けを洗いざらい大坪被告から証言を導き出せば、歪んだ検察の実態が浮かび上がってくるはずである。

国民の目が注がれている。検察の改革には、事実を立実として受け入れる国民の賛成にも期待しなければならぬ。いことだけは間違いないであろう。手術の要論は傷口は小さく、日本の背骨である検察の改革もポイントを外さず傷口だけは小さく改革を断行だ。



平成14年5月号の本紙